

## かもめ：小説

著者	安達，伸男
雑誌名	龍南
巻	2 1 0
ページ	1 - 1 4
発行年	1929-07-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6869">http://hdl.handle.net/2298/6869</a>

# か め

安 達 伸 男

夕浪倦みぬ、——さこそ吾。

眞白羽ゆらに飄りし、

鷗は水脈に、——さこそ、わが

魂よたゆたに漂へれ。

——「海のおもひで」——

## (一)

五月十四日

今日も作業、罐内部の掃除。夕方別科残業を終へてから時計を見ると六時半に間もなかつた。

顔を洗つて軍服に着換へて上陸札を貰ひに行く。

先の休暇の歸りに三十分程切つたので二回上陸止めをくつたが、今日解かれたのだ。流石に嬉しい。

まるで一週間も海の上に居る様な氣がする。

陸に着くと棧橋から眞直に集會所を指した。大氣は生温るかつたが俺の氣持だけは珍らしくす／＼しかつた。砂利を噛む靴音にさへ妙に懐しいリズムを感じた程であつた。

勞働手當を八十錢貰つてゐたから集會所で一番安い楊子を十五錢奮發して購つた。新しい「軍人齒ブラシ」を手にとると先刻

ランチから海に投げ捨てた摩り切れ楊子がふと頭に浮んだりした。

海軍橋を渡り乍ら例のどぶ臭さをシミジミ味はつてみた。何となく潮つぽい海風よりもあの泥の匂ひが俺には懐しく思はれる様だ。

俺は醫學の知識がないけれど、一般に舟乗り稼業の者には壞血病と同じ意味で、餘り長く土地と接觸しなかつたら懷土病とでも云ふ病氣が起りはしないだらうか……などとそんなつまらぬ事を考へ乍ら街へ入った。

暗い構内から明るい町に出ると、直ぐ俺の眼を捕へるのは赤い提灯と繩の暖簾だ。酒屋の前はどうしても素通り出来ないのが俺だ、烟酒の匂ひと天麩羅をあげる音に堪らなくなつて飛び込んだ。

腰を下して店の柱時計を振りかへると八時廿分前をさしてゐた。とうとう又酒に誘惑されて了つた……そんな後悔めいた氣持ちの端くれがヒョイと頭を擡げかけたが、白く塗つた女達のなまめかしい聲にあわてて引つ込んでしまつた。

夜の『馬鹿盛』は流石つたに賑やかだ。明るい電燈の下では女達が莫迦に美しく見えた。安白粉の香りに交つて發散する女の体臭がこそぐる様に鼻をかすめた。八時の點鐘までと思つて二合ばかり飲んだ。顔にホンノリと火照りを覺えたが氣分はこの上もなく結構だつた。俺のやうな國家の干城達が外にも未だ五六人此處彼處のテーブルを占めて女を相手に飲んだり巫山戯たりしてゐた。獨酌でチビリチビリやつてゐた俺には彼等の大膽に歌つたり騒いだりするのが羨しい様にも思はれた。

隣りの席で一等水兵が酔つて性惡く、だを捲いてゐたが果ては立上つて亂暴をし出した。急に俺は不愉快になつたので勘定を拂つて出た。財布には廿錢をこらしか残つてゐなかつた。

外は風さへない軍港の夜だつた。氣のせいか夜氣にうどんの汁みたいな匂ひと温みとを感じた。

傲慢な巡邏が許された限りの職權を行使する爲めに人の好いそして不注意な水兵達を漁りあるいてゐた。

八時十分の定期で歸艦した。點檢が終はりハンモックに上つたが直ぐには寝つかれなかつた。

眠りに入る迄に色々とりとめも無い考へに耽つた。……酒を飲む事は決して心からの慰めにはならないものだ。酔つた間は少しは氣も紛れるが醒めての後は直ぐ後悔に似た不機嫌さを味ひ憂鬱とも哀愁ともつかぬ一種の重苦しさを感ずるだけである。

俺は今まで幾度か禁酒を實行しようとしたが、酒のない生活を想像しただけでも空虚極まるとも忍び得ないものの様な氣がしてとうとう廢める事が出来なかつた。そればかりでなく結果は反對に無茶苦茶に分らなくなる迄飲む悪い習慣がついた。それが禍して休暇中に意外な事件を惹き起して了つたのだ。でも今俺は酒を斷たうとは思つてゐない。酒に飲まれない程度なら良いと思ふ……そんな色々な思ひの中に誘ふ様な眠りが潜んでゐた。

何だか蒸し暑いやうな夜だ。海も靜かに寢んでゐる。明日は雨でなければよいが。

## 五月十六日

日曜であるが作業はやつた。今日で三罐とも内部掃除が終はつた。何も別に書く事はない。今年後五時十五分。これから入湯に出かけるところだ。

風呂に入つたら何だか書きたくなつた。……

俺の性質として他人とは餘り話さない。話すのが可厭と云ふよりも人と對ふと思ふやうに言葉が出て來ないと云つた方が適切だらう。結局喋るのが煩はしくなつて黙つてゐる。これは子供の時からの癖であつた。親に呼ばれても急に返事が出来なくて叱られたり先生なんかに向つてもてんで云ひ度い事が満足に口から出ないで困つた事も覺えてゐる。あれは……さうだ十八の時だ。忘れもしない初戀の思ひ出。近所に喜美子といふ娘がゐた。年は俺より一つ上の十九。中學を三年でよした俺は其頃叔父の店に勤めてゐた。毎朝俺は店に通つたが途中に喜美子の家があつた。彼女は綺麗なといふより人好きのする明るい感じの娘で色は淺黒いが整つた面立ちであつた。俺とは小學校時代によく遊んだ幼なじみであつたけれど俺が中學に入つた時に彼女はもう女學生で毎朝汽車で市まで一緒だが、少女の氣恥しさから言葉をかけても呉れなかつた、が憚る様な會話をした。それに俺は只出會ふ度にどぎまぎしてあわてて了ふだけで獨りになつた後ではいつも俺の心の弱さがうらめしくなるのだつた。こんな風だつた俺達

も其後お互に學生でなくなつてみると流石に一緒になる機會さへもなかつたが、同じ町の中だつたから時偶に彼女の姿を——めつきり處女らしくなつた彼女の姿を認める事はあつた。そして相不變俺は小學校以來何となく慕しい思をかけてゐただけに彼女に逢ふと吾知らず顔が火照つたものだつた。彼女も亦俺の顔を見ると羞しさうに俯いた。俺はそれが單に幼な馴染みの羞みばかりとは思へなかつた、俺に對しても何等か感情を懷いてゐて呉れるのではないかとさへ思つたこともあつたが、はにかみ屋だつた俺はたゞ彼女のはれやかな顔を見るだけで満足しなければならなかつた。俺は店に通ふ毎朝家の前を掃いてゐる彼女を見なければ其日一日が何となく物足りなかつた。だから大抵時間をきめて家を出た。彼女もやはり時間をたがへず姿を見せてゐる様に思へた。梅雨になつて雨が何日も降り續くと俺は彼女の姿を見たさに夜更けて雨の中に半時間も佇んでゐたり優しい聲を洩れ聞いたりして満足して歸つて來たりした。とう／＼そして俺には彼女が忘れられないものになつて了つた。

俺は夏的一天彼女と一緒にになる機會を得た。それは叔父の家内舉つて鼠島へ舟遊びに行つた時従姉の數代と學校時代の親友だつた喜美子も招かれた。魚釣りや泳ぎやらで皆は愉快にはしやいだ。けれど俺は妙に重苦しい沈黙をつづけた。此日始めて俺は彼女の發達しきつた肉體を知つた。それは惱ましい迄に俺の心をいらだたせずには置かなかつた。幸に岩陰に二人きりで残るチャンスがあつた。堪え難い焦慮に驅られた俺は今だ！俺の想ひを訴へるのは今だ！と思つたけれど俺の口不調法と氣弱さはその衝動を裏切つて遂に愛の告白が出來なかつたのだ。俺は歪んだ魂を力なく抱いて憂鬱な時を過すだけだつた。その夜家に歸つて寢床の中で考へれば考へるだけ俺自身の不甲斐なさが悔みられて涙はとめどもなく出た。はては身悶えして口惜しがつた事。それから、あのむづちりした美しい彼女の肉體を妄想の中で漬けしつづけた事。それらも今では懐しい想ひ出に蘇つて來る。その年の秋に喜美子は町の素封家に嫁入りをして俺の初戀が型通りに破れたのだから。

それにしてもつまらぬ事を思ひ起こしたものだ。俺は日記帳や原稿用紙に向つて話しかける時だけどうしてこんなに不必要にも饒舌なのかしらん。困つた俺の性分だ。

俺は人に話したい事が自由に述べられぬから此日記にそれらの話したい事を自由に書くつもりだ。

五月二十五日

暫らく日記を怠つた。どうしても氣が進まずペンを手にする氣にならなかつたのだ。今日は朝から頭がづきんづきんと痛む。何もしたくない。何をしてもつまらない氣がする。

五月三十日

午後二時半大阪港着。二日午前大阪發の豫定だと。

(11)

六月三日

この頃はまた世の中が面白くない。二十圓餘りの借金に追はれてゐるのだ。さびしいので、本を読みたいんだが、讀む本として一冊もない。退屈で憂鬱だ。

六月十三日

昨日午後五時半横須賀入港。土曜日で半艫上陸があつた。佐世保出港以來久し振りに入浴した。泊り番だつたが無一文では仕方がなかつた。むせる様な色街の歡樂も今の俺には縁遠いものだつたから仕方なく九時の定期で歸つて艦で寝た。

今日は珍らしく日曜日課も朝から休みであつたが俺は今月中炊事當番でこ暫くは休み無しとは損な役廻りだ。

昨日上陸の際に母の許へ、今日大阪の従兄弟の許へ金の無心狀を送つた。五六ヶ所併せて二十三圓六十五錢の不義理で俺は惱まされてゐるのだ。母にはあんまり度々で濟まない。兄の手前もある。何時迄もこんな事ではいけないと俺はつくづく思つてはゐるのだが。

六月十七日

母から手紙が來た。二時間程前に受取つたのだが、何だか怖ろしくてまだ封を切らない。此の前のも封を切つたまゝ未だ讀んではゐないのだ。萬が一を心頼みにしてゐたのだが今日届いたのは書留ではなかつた。

弟の便りによると父母は俺のために泣いてゐられるとの事だ。ほんとうに不孝な俺だ。だが——

過去の事や未来のことや借金 of 始末をよくよ氣に病んでゐても仕方がない。それかといつて甘い夢に陶醉する氣にもなれない。まあこれからはせいぜい自重して何か勉強の方に力を注ぎたいとは思つてゐる。然しこんな月並みな決心も飽く程やつて見たし破つてもみた俺だ。所詮、行くがまゝに委せて置くのが卑怯か知らぬが俺の生活態度だ……とそんな氣持がする。

六月十九日

伊勢灣碇泊中。

毎日の事だが今日も憂鬱で頭が痛い。

ただそれだけ。

(三)

八月四日

随分長らくの間日記を書かなかつた。然しこれからはなるべく毎日一字でも一句でも書くことにする。文章でも書でもいいやそれに限つた譯ではない何事に依らずそのものから久しく遠ざかつてあると出来なくなるものだ。俺なんかもとと文章も書も全然駄目なのだから尙更の事である。俺の様なつまらぬ人間がこんな不味い文章を一生涯書き續けたところでそれが果して何の價值があらうかとそんな氣もする。がそんなことは少くとも現在の俺には何等の意義をも持たぬように見える。未來は未來だ。明日は明日。俺は明日死ぬかも知れぬ人間だ、だからそんな問題は實際俺の思考外の問題だ。明日と云ふ日が来る迄は昨日があつて今日があればそれで充分なのだ。俺は關はる必要は毫もない。恐らく俺の思想は赤ん坊の様に幼稚かも知れぬ。俺はそれで結構だ。泣きたい時に破れる様に泣き、笑ひたい時に顔が崩れる迄笑ひましょう。赤ん坊の如き徹底した『我儘』で人生を歩みつけやう。俺に授けられた人生は結局俺自身のもので他人のものではないのだから、假令こんな人生觀が淺薄で誤りだらけであつたにしてもそれが何だらう。

久し振りでペンを握つてみたらスラスラとペンの尖端からこんなものが紙上に流れ出た。今日本艦は午後三時三十分佐伯を出港して來た。夕食前に弟に宛て手紙を書いた。例に依つて例の如き無心狀である。俺自身が作つた借金ではあるが俺も此頃は苦しいのだ。時々堪えきれない程の苛立たしさを覺へる。神經衰弱の方もなかなか癒りさうにない。俺の良心は責めるのだ俺の意志の弱さを。絶ち難い煩悶は俺自らを欺く。制し切れぬ情慾は不可抗力に恥づべき惡習慣を強いる。かうしてこの忌はしい罪惡は俺の身心を蝕んで行くのだ。海上生活の單調さと空虚さとは俺達の充たされない情慾を激しく刺戟して秘密な而も不自然な快樂に耽けらせるのだ。この惱しさを忘れさせて呉れるものは酒だ。この惱しさを随まで刻み込んでくれるものは女の妄想だ。あゝ！それよりか當面の問題は金だ。今日計算してみたら總計十九圓餘。人は嗤ふかも知れぬが俺にとつては大金だ。金が欲しいが重なる無心は辛い。

## 八月五日

今午後七時半。第一潜水戰隊夜間發射訓練の目的で本艦は航行中。艦首にあたつて碎ける波の飛沫が連續的な響きを立ててゐる。昨夜の十二時から今朝の四時迄<sup>あけ</sup>曉直を勤めたので午前中作業を休んだ。昨夜は四時間足らずしか睡眠をとつてゐないので時々ふらく眼がまはる様な感じがする。

今日も亦今暫くすると出勤だ。任務は晝夜間戰闘射撃。俺もこれから當直に下らねばならぬ。

## 八月十五日

又十日間日記を休んだ。特別な理由があつたのではなくペンがなくなつたのを盾に書くのを怠つた。之も矢張り俺の意志の強くないせいだ。今後決してこの様な怠け心を起してはならない。ふさいで色々くでもない妄想を事としては不可ぬ。ただ瞬間を意義づけ生かして行くことだ。俺自身外界を眺望するのはいい、がその爲めに壓迫せられたり心を動搖させられたりするやうなことでは寔につまらないと思ふ。

それにしても俺の神經衰弱は可なり重いやうだ。頭痛や眩暈がしたり、心悸亢進や恐迫感に襲はれたりする事も珍らしくはな



い。機械的に犯す不自然な行爲を禁ずる事が出来たらと後悔するが習慣の隋性は意外にも力強いものだ。

然し一方に俺の意志の反動的な働きもある。

俺は病と癖との持久戦を試みやう、そして最後迄闘ひ通して見せる、俺はこれから、以前の俺と違った強い俺にならう。徹底的に健康を恢復する爲めにはあらゆる誘惑に克たう。酒が何だ、性慾が何だ。：と思ふのがさうだ。

俺は今靜かな境地を求めてゐる。地位も名譽もその前には無價値な無意義な存在である様な一つの絶対境が欲しい。苦惱も慾望もない靜かな仙境が欲しい。

こんな文章を書いてゐる時は少くとも俺には一番幸福なやうだ。壓制と酷使とが命令の名に於て絶対服従を強ゆる社會に於て僅かに個性を滲み出せるのは唯この時だけだ。現在のこの冷靜さをかき亂されるのが怖い。けれど……。

今夜九時半出港、來島水島まで軍令部長を送る豫定。今日は時々、今にも死にさうに思はれる程鼓動が烈しくなり居堪らぬ様な恐しさに襲はれた。若しかすると俺の生命の長くない前兆ぢやないかしらと思ふ。

## 八月十六日

正午より四時迄の航海直を勤め上つて來て夕飯を済ましそれから汗じみた身体を拭ふて卓子につくなりペンを執つて日記帳を披いたのだ。身心の疲勞はなはだしい。

今朝、午前六時目的地來島水道着。陸海軍航空機の爆彈投下演習を觀望した。

今午後五時。程なく、三津ヶ濱に入港。正規の上陸許可せらるる豫定。俺は泊り番だが文無しで上陸しても何にならう。酒が飲めるでなし女が買へるでなし結局艦に寝る事になるんだ。それでゐて嫌な夢ばかりに淺い眠りが破られ勝ちで短い夜を過ごして了ふ位が落ちだらう。

平常の心掛けが悪い爲め自業自得と思へば何とも致し方のない次第である。おまけに、性來孤獨的な俺には慰めて呉れる同僚もなければ力となつて呉れる親友もないのだから。

## 八月十七日

午前六時十五分三號鐘點火。八時三十分三津ヶ濱發航。途中風が稍強いやうであつたが瀬戸内海の事とて艦の動搖は極めて輕微である。

午後三時少し前佐伯灣のものと錨場に投錨。

軍事點檢後進級試験が行はれた。少し頭痛がしたが俺は砲術の試験を受けた。進級試験など毛頭懸念してゐない俺にとつては結果が良からうと悪からうと至極平氣だ。俺はすべてこんな事に冷淡でありたい。

内海の島々が乳色の夕靄に包まれて今日も暮れる。

俺は寂しいまゝに戀ひしい女の事を想ひ出す。

女よ、俺の胸裡に巢喰うて離れぬたつた一人の女よ、お前は今頃どうしてゐる事か。俺はこんなうらさびしい夕には何時もお前の事をおもひ出す。そして虚ろな幻影を描いたり消したりする。

女よ、しかし俺は今涙してゐないんだよ。何時かの晩、寢物語りにお前の身上話を聞いて泣いてやつた俺、だがあの時の俺は世間知らずの甘い奴に過ぎなかつたけれど今はお前達の偽らぬ姿を、手練手管の覆ひ越しに冷い眼でみつめる事が出来るのだと思ふものの……

女よ、お前が俺の同情を買ひ俺がお前の愛を買ふ。欺されてゐるのを知り乍ら、冷靜な心をもち乍ら、それでも俺の想ひは募る。いや、俺の理性が強くならうと喘ぐだけ俺の言ひた戀情が強くなる。俺は矢張りお人好しの白痴なのか。……それでいい。それでいい。

## 八月十八日

佐伯碇泊中。午後石舩直員散歩上陸があつたが財布の中が空虚なので上陸は止した。晝過ぎ二區へ行つて洗濯物下し方もせず夕飯時まで眠つた。夢の多い午睡に俺の身体は怪しいまでにくたびれて了つた、夕方別科の水泳をサボつて罐室に降りて行つ

て過去の様な思ひ出に浸つた。

郷里で伯父の店に勤めてゐた俺も一寸した輕卒かるはつみから居れなくなり大阪へ奉公に出た廿歳はたちから今日まで約五年の間随分苦勞を積んだ。俺は當時の思ひ出話を聞いて呉れる友もないから何時か纏めて書いて見たいと思ふ。

回想は次から次に極まりなかつた。俺は久し振りに年老いた両親、立派な男になつた兄弟達の事を考へて珍らしく心の底から骨肉に對する親しさ懷しさを感じた。いくら疎であつても矢張り血を分けあつた仲である。

俺は彼等の味方であり俺の味方は彼等であるのだ。然し俺の過去を考へると彼等にとつた俺の行爲は何といつて良いだらう？俺はその爲めに強い悔ひの筈しほもとを胸にうける。俺はだが決心してゐる。何時かは彼等に合點して貰ふ日もあるに違ひないと。

父よ母よ兄よ弟よ、叔父さん、數代さん

幸に健在なれ！

夜になるとなぜにかう寂しく噓ろな氣になるのか。惱ましい女の妄想が俺の魂を蝕む様だ。

女よ、お前は何故こつちを視ないんだ。なぜにそのやうに俺から顔をそむけてばかりゐるのだ。どうしてお前はそんなに冷淡なのだ。

俺がおもひ出さうとすると何時でも俺に背を見せるか不精々々に冷かな眼ざしを注ぐだけだ。

何時のまにお前はつめたい女になつたのか。俺がお前と初めて會つたあの晩の事を覚えてゐるか、眞實にお前は俺の身も心も温い腕で抱きしめて俺もお前の身体も魂もと抱きしめたあのしびれる様な力と力とを、お前は又白いふくらみの下にうづく鼓動を聞かせて呉れた。涙でぬれた頬と頬とすり合はせて血が出さうな程激しい接吻を續けたのもあの晩。俺はあれからお前を忘れられなくなつて通ひ出した。それに間もなく意外にも別人の様なよそ／＼しいお前の態度だつた。たぎる様なお前の体温を感じ乍らお前の冷淡さを審らずには居れなかつた。お前のあんな白々しい半面を信ずる事は呪はしい事だ、何故なのか。：云つて呉れ

ないし又聞ける俺でもなかつた。けれど俺はお前を離して丁ひたくない。お前の全てが戀しくなる。火の様に燃える情熱と氷の様にすぶく冷情と。お前の不可解な性格は狂はしい魅力となつて俺をつかまへて離さない。

女よ、俺はお前を逃がさない。嫌つてもいい。嫌ひぬいてもいい。お前が俺の戀も魂も食つて了つて構はない。俺の血液も精根もお前が吸つてくれるのなら喜んで送り出して了ふ。お前の白い腕でこの咽喉を締めて締めて……殺したつていい。俺を荒縄で縛つて蹴り轉がして、叩いて、突いて……かきむしつて、嚙りついて、斬りさいなんで呉れたつて俺は満足だ。俺はお前の足の裏でもなめよう、……

だが俺から逃げるなら逃げろ。俺の心の中から逃れられるものなら逃れて見ろ。其時こそ……あゝ！

## 八月十九日

今日八月十九日はおばあさんの命日だ。

俺のおばあさんは俺が中學の三年の初夏になくなつた。本當は俺達の祖母ではなく俺の祖父の姉か妹かにあたる人で夫に先たれ子供のない所から晩年に生家なる俺達の家に歸つてゐたものだ。

おばあさんの在世中俺達はこんな事情等知らず又糺さうともせず唯おばあさんおばあさんと呼びなれてゐた。

おばあさんは近邊にも類のない程肥満してゐた。首や手首の肉の輪を今でもありありと思ひ起す事が出来る。

おばあさんは一年に二三回徳島へ出向いて行つた。徳島へでかけると半月ばかり滞在して来るのが常だつた。おばあさんが留守になると俺の生活は火の消へた様に寂しかつた。學校から歸ると父も母も仕事に往つて戸の閉まつた我が家の前の竹垣に腰掛けて南の方を凝視めてはおばあさんの歸りを待ち焦れたものである。佗びしさの餘り竟には俺の心情を酌んで呉れないおばあさんを少年らしく憎んだりもした。

おばあさんは南の街道からひよつくりひよつくり家鴨の様な恰好で疲れた身體を重さうに、でもニコニコ笑ひ乍ら何時もの淑

かさを失はずに歸つて來たものである。おばあさんを待ち焦れてゐた俺の心には、おばあさんの土産にきまりきつた瀧の焼餅も何もなかつた。唯おばあさんが俺のそばに離れないでゐて呉れる事だけで俺は満足だつた。唯おばあさんはその頃俺に光と熱とを恵んで呉れる偉大なる太陽だつたのだ。幼な心にもそんな氣がしてゐた。

おばあさんが胃癌で床に就いてから苦しい容態が一月も長延いた。それにおばあさんは厄介になつてゐる身の長患ひを非常に氣にしてゐた。

朝病が革まつたと云ふので醫者を呼んだり人を招いたりして忙しかつたが俺と弟とは登校の爲め家を出た。弟に別れて俺は獨り重い足を引づつて停車場に向つた。俺は不安で學校に行く氣もしなかつた。

授業中も氣がかりで教師の講義も耳に入らず時間の經つのが待ち遠しかつた。三時半過頃、灼熱の太陽を浴びて停車場から家路を急ぐ途中でおばあさんの死去の電報をうちに行く弟に行き逢ふた。弟の顔は蒼かつた、唇は慄へて言葉もみだれてゐる、けれど俺の方がもつと蒼く、もつと震へて、もつとシドロモドロだつたに違ひない、我乍ら何か分らぬ事を弟に口走しつて。俺は一散に驅け戻つた。

息をはづませ乍ら俺は枕もとに坐はつた。朝別れたおばあさんは両親や親類近所の人々に圍まれて北枕で眠つてゐた。氣のせいか笑つてゐる様な平和な死顔だつた。俺は直ぐには涙も出なかつたが通夜の晩とうとう泣き明かして了つた。

おばあさんの財布の中に五十錢銀貨と十錢白銅があつただけで五十錢の方を俺に十錢の方を弟にと、それがおばあさんの遺言であつた。

俺はそれからは尙更むつくりした暗い心を持つ様になつた。

このおばあさんを俺はいつか小説にでも書いて見たいと思つてゐる。

八月二十一日

今午後九時二十六分。愈々佐伯灣も十時に出港。

母航佐世保に回航の豫定。

五月廿七日綠濃き佐世保の山々を後にしてこのかた先ず博多を振り出しに大阪に寄港、館山、伊勢灣、和歌の浦を経てこの佐伯に來たのが前月の中旬、酷暑の訓練も無事終了し、明日はざつと三ヶ月目に母港に錨を入れるわけである、久し振りの歸港に全乗組員の心は躍つてゐる様に見受けられるが、下宿に僅かな借金が氣になつて俺の氣持はひどく重苦しい。佐世保がだんだん近まるにつれて九圓七十錢の偉力が俺をめぐけて肉迫して來る様だ。俺はこの不愉快極まる感情の中から、『どうにかなるだらう』の苦しまぎれの逃避處を發見して纔かに自らを安んじやうとしてゐる、丁度俺がこれまでその逃避處に潜んで幾度とない難關を曲りなりにも切り抜けて來たやうに。

## 八月二十二日

關門通過が曉の五時頃。午後四時懷しの佐世保入港。

日曜日のことなれば左舷直員は正規の上陸。半舷員が残らず上陸すると甲板が何となく森閑としてゐる。

昨日迄の佐伯は天幕の蔭にゐれば割合ひに涼風があつて凄ぎよかつたが、今日は風のない爲めか佐世保は酷く暑い、下甲板でかうしてゐると汗が自然に滲み出る様である、ギラ／＼反射してゐる海面、眩ぶしい迄に輝いてゐるクレーン、修理艦を抱き込んでゐるドック、右往左往するランチ、カッター、工廠の汽笛、赤いヴィ、白い波止場、………すべてが親しい母港のたたずまいである。

この頃の様に苦境のどん底みたいな呼吸をしてゐると泌みじみ生活の意義と云ふ奴が判らなくなる。

昨晚、皎々たる舊盆十四日の月を見乍ら、故郷の盆踊りを想ひ出した。何だかあの懐しい囃の調子が海の底からでもだん／＼に響き出して來る様だつた、艦が浪を蹴る音にあはせて太鼓や笛の韻がする様な氣がした。俺は手拭ひで頬かむりをして踊り出したくなつた。不圖我に歸つて……。

日記はこゝで終つてゐる。

三年前の夏の事である。私は或る舟着場で渡し舟を待つてゐた。其處は軍港の内ではあつたが入り江になつてゐて波の穏かな濱であつた。私は浪のまにまに浮かんでくる五六枚の紙片を發見した。私の好奇心はそれを拾ひ上げさせた。それがこの日記の斷片であつたのだ。どうしてこの日記が捨てられたかは知らない。この残りの部分に對する私の好奇心は限りなかつたけれどもどうも流れては來なかつた事も附記して置く、これが一水兵によつて書かれた事であるだけに私は面白く思つて持ち歸つた。若し私の筆が許して呉れるならこの日記も何等か一つのまとまつた形式のものになつたであらうが、遺憾乍ら私には力及ばぬものである。私は出来るだけ忠實に寫して置いた。